

暗闇を見る：視覚の因果説再考

前田 高弘 (Takahiro MAEDA)

無所属

我々が（我々の心とは独立に存在するものとしての）物理的対象を見るためには、我々とその対象との間に適切な因果関係が存在していなければならない。特に、関連する視覚経験の生起と、その経験の持つ特定の（現象的または表象的な）性格が、その対象の存在と性質に適切な仕方で因果的に依存していることが必要である。これが視覚の因果説の基本的な主張であるが、そのもっともらしきにかかわらずしばしば反対されることがあるため、私はかつてこれを擁護する議論を行った（「視覚の因果説」『科学基礎論研究』第 98 号、pp.51-57）。今回は特に、暗闇を見ることとのかかわりにおいて因果説を再考したい。その論文の中でも暗闇は因果説に対する可能な反例として言及されているが、そこでの扱いは適切なものではないと今は感じている。それが再考の主な動機である。

確かに、暗闇の中に在るものを見ることはできないが、暗闇そのものは視覚的に知覚されうる（盲人は暗闇を見ることはできない）。また、暗闇についての錯覚や幻覚も起こりうる。だが、暗闇を見る際、環境から知覚者への因果作用は一切存在しない（ここでは暗闇を局所的な暗闇としての影などとは区別している）。それゆえ、暗闇は一見したところ因果説に対する反例となるように思われても不思議ではない。

この「反例」に対する言わば安易な対処法は、反事実的条件法に基づく Lewis 的な因果観を採ることである。すなわち、環境から知覚者への因果作用（エネルギーや力の伝播といった形の）がなくても、関連する反事実的条件法が成り立ってさえいれば、知覚のための因果的要件は満たされると見なす。だがこの因果観は、先の論文でも触れたように、因果説の基本理念にそぐわない。そのうえ、逸脱的因果連鎖による反例を暗闇についても考案することができる。

もう一つの安易な対処法は、Sorensen (*Seeing Dark Things*, OUP) がそうしているように、不在因果というものを認めることである。私は不在因果について以前ほど否定的ではないが、それが論争を呼ぶトピックであり続けていることは否定できない。また、不在因果の説得的な例として挙げられるものはたいがい、ネガティブな因果的要素に加えてポジティブな因果的要素も本質的に含んでいる（両者が絡み合っている）。だが、暗闇の場合、関連するポジティブな因果的要素が全く見当たらない（この点で暗闇は局所的な暗闇としての影などとは異なる）。それゆえやはり、必要がない限り、安易に不在因果にコミットすることは避けるべきだろう。

私が先の論文で提示した対処法は、要するにポジティブな因果作用との対比に

訴えるものであった。すなわち、局所的な暗闇としての影が、光を放射／反射する周囲の環境的事物との対比によって知覚されるように、暗闇も、過去に体験された通常の（ポジティブな因果作用に基づく）視覚経験との対比によって知覚されると考えたのである。しかし、スワンプマンの例などが端的に示唆するように、この対処法も適切なものではない。（昔と違って私はスワンプマンの形而上学的可能性について否定的ではない。）

解決の糸口は、ものを見ることと空間を見ることの違いを認識したうえで、暗闇を見ることを光のない空間を見ることとして解することにある。基本的に因果説はものを見ることに関するテーゼであり、このテーゼが空間を見ることに関しても同様に成り立つと期待するべきではない。（確かに、単なる空間がものと同じように視覚経験を生じさせる因果的パワーをもつとは考えにくい。）

知覚者と特定の時空領域との間の視覚的なつながりは、その時空領域から知覚者への因果作用（それがどのようなものであれ）によるのではなく、単純にその知覚者が時空内の特定の位置を占めることによる。すなわち、特定の時空領域と視覚的につながるといことは、その時空領域内の特定の位置に存在／生起する物理的事物からの因果作用を被ることができる位置に知覚者が居ることによって過ぎない。この場合、視覚的なつながりは時空的な位置関係によって自動的に達成されており、因果関係のようなものは必要ではない（テレビ中継のようなケースを除く）。空間を見ることにとって重要なのは、現実の因果作用ではなく、むしろ可能な因果作用に反応する知覚者の能力である。

暗闇とは光のない空間に他ならないとすれば、暗闇を見ることも同様の仕方で説明される。つまり、暗闇と視覚的につながるためには、関連する時空領域からの可能な光刺激に反応する能力をいつでも発揮できる状態にしなが、ただその暗闇の中に居るだけでよい。（それゆえ、暗闇の中で誕生したスワンプマンでも暗闇を見ることはできる。）その際、見ることができる暗闇の範囲は、可能な光刺激をどの範囲の時空領域から受け取ることができるかによって限定される。だから、たいていの人は背後の暗闇を見ることはできないし、真っ暗な倉庫の中に在るコンテナに閉じ込められた人はコンテナの中の暗闇しか見ることができない。

基本的に同じことが、局所的な暗闇としての影についてもいえる（ここでは影を、照射される光が周囲より少ない物体表面の部分などとは区別している）。影を見るときに知覚者が実際に見ているのは、局所的に光の欠如した空間の部分である。それゆえ、影を見るときに、影から知覚者への因果作用が全く存在しないことは、暗闇を見る場合と同様に何ら問題ではない。したがって、影との視覚的なつながりを説明するために、影の周囲の明るい部分に訴える必要はない（影の形や境界はその明るい部分との対比によって識別されるが）。

影を見ることに関するこのような見解は、影を因果説に対する反例として用いることを無効化するだけでなく、二重日蝕やシルエットを見る際に知覚者が何を実際に見ているかについて、Sorensen の答えよりも穏当な答えを示唆する。すなわち、関連する対象の光を吸収する部分（知覚者とは反対側にある）ではなく、その部分によって生じた影である。